

# 日本 戦闘の 者



荒谷 卓（あらや たかし）  
生年月日：昭和34年秋田県出身  
略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職（1等陸佐）。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。  
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。  
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める  
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動かない力』三笠書房  
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス  
<https://musubinosato.jp/>



平成22年（2010年）7月30日、俺は第1回「憲法を起草する会」を開催した。これは、「百姓侍村」とも関わりがあることだった。俺は何度生まれかわっても日本を守る戦闘者でありたい。俺が守りたい日本は、俺たち日本人の祖先が、長い歴史の中で汗水たらして作ってくれた日本の文化伝統だ。それが無くなれば日本は日本でなくなってしまふ。主権、領土、国民などという近代西欧で発明された権利思想は日本とは全く無関係だ。むしろ、そうした奴等の権利を正当化するグローバル化思想によって、日本をはじめ世界中の人々が生命も土地も略奪され、奴らの都合のいいように歴史は塗り替えられ秩序は強制されてきた。

日本は、大東亜戦争に至るまで国民一丸となって英米の主導するグローバル化と戦ってきた。しかも、我が国のみならず、アジア諸国をもグローバル化による植民地化から救済するためアジア諸国の代表とともに大東亜共同宣言を打ち立てた。これこそが、世界ではじめてグローバル化から脱却する思想と世界の在り方を国際社会に宣言したものであった。諸国家がそれぞれの伝統を尊重し人種差別のない共助共栄を秩序とする国際社会を形成するため、日本人は犠牲を省みず魂を奮い立たせて戦った。そして、現実に東アジア一帯を欧米の植民地化グローバル化から解放した。

しかし、終戦後の7年間に及ぶ米軍占領下に、日本国はグローバル化の側の手先と化してしまった。自分たちが何を守ろうとしていたのか、何と戦っていたのかを完全に忘れてしまい、日本人が命をかけて守ろうとしていたものを日本人自らが破壊することとなる。戦後日本の経済繁栄とは、グローバル化に身を任せ、そのルールの中でよい成績を収めることでしかない。だから、冷戦間に世界第2位の経済大国になろうとも、世界のルールメイキングには全く関与できなかった。そして、冷戦とともに対ソ戦略上の日本の役割は終わった。そもそも米国は、二度とグローバル化に反発できないような弱小国として日本を管理する予定だったわけだから、現状は、冷戦間に日本に稼がせたマネ

ーを回収するための移行期間ということだ。日本が、グローバル化を進めれば進める程、我々の祖先が築き上げてきた有形無形の財産は市場に収奪されていく。日本の貴重な資源が中国人に買い取られていくのは、中国政府の思惑ではなく、市場の要求に従い我が国の政府が市場開放政策を推進することの結果なのである。にもかかわらず、左翼のみならず保守と称する者たちまでがグローバル化を歓迎し米国の手先となって、市場原理を地方にまで持ち込み壊滅的な文化破壊が進んでいる。メディアは完全にグローバル化の宣伝機関と化し、日本の歴史文化を否定しグローバル化を賛美している。

同時に、中国、ロシアを敵として意識させ、本当の敵の所在を分からないように偽装している。敵は対立させて管理せよという英国の古典的戦略にまんまと乗せられ、敵を誤認し味方を見誤り、敵を利用して自ら破滅の道を歩んでいる。中国が強大な敵になりつつあるのは、中国自らがグローバル化政策をとり、世界中のグローバル化が中国に利用価値を見出しているからだ。また、大東亜戦争末期、米・英がロシアに対し参戦を強く要求し、北方4島を含む千島列島をロシアに譲るとの約束で米艦艇144隻を貸与して日本を攻撃させた事実や、シベリア抑留で亡くなった数の倍以上の日本人が米・英・豪によって虐殺された事実は隠べいたままだ。しかも、自分たちが日本兵に対して行った虐待・虐殺行為を、反対に日本兵が英・米兵士に行ったなどと平気で嘘をつくあたりは、現下のロシア・ウクライナの虚偽報道と全く一緒である。

当然のことではあるが、奴らが作ろうとしている世界秩序の中では、日本人が守り続けてきた歴史的伝統文化は守れない。地域文化や慣習というローカルスタンダードを破壊し尽くさなければグローバルスタンダードは成立しないからだ。「守るべき日本」とは何かを議論もせず、ロシアの脅威や中国の脅威に対抗するためには米国に頼むしかない洗脳されてきたが、「守るべき日本」を侵食してきた最大の脅威は米国であり市場であることに気付くべきだ。日本の伝統文化を失った国籍だけ

の日本人と、新世界秩序の下に管理される日本に守るべき価値など存在しない。もし、日本を守るとすれば、歴史的伝統文化を守るしかないのだ。

そのため、占領米国人によって作られた日本国憲法ではない「日本人がつくる日本の秩序」の回復が必要である。また、グローバル化が進める新世界秩序下に日本を含む世界の国々が置かれようとしている現状から脱却しなければ日本は守れない。何もしなければ、グレートリセットによって新世界秩序、すなわち、「国民主権国家を廃絶し、世界政府のパワーエリートにトップとする 地球レベルでの政治・経済・金融・社会政策の統一、究極的には末端の個人レベルでの思想や行動の統制・統御を目的とする管理社会の実現を目指す」世界秩序下に日本が管理されることになる。

俺は、このことを20年以上前から察知し、「日本人による日本の秩序」づくりを進めることとした。それが「憲法を起草する会」である。自分たちが生きていくための規則は自分で作るという当たり前のことが出来ていない。「自由だ自由だ」というのは真っ赤な嘘で、自分たちの社会がどうあるべきかについて自由な議論など聞いたこともない。明治の時代、大日本帝国憲法を制定するのに8年をかけ、一般の国民の中から100余件の憲法草案がつくられたのに、現在は、たかだか現憲法の改正案ですら10件に足りない程度、しかも一般国民の自由な声から出てくる憲法草案などは全く聞かない。つまり、国民の頭が洗脳によって自由な発想ができないような構造になってしまったのだ。

だから、法律の専門家とか政治家とかを集めての会議ではなく、普通のおじさんおばさん、若者から年寄りまでが日本のことを真剣に考える場を作ることが大事だ。議論の内容も、現憲法の改正とか元に戻すかではなく、祖先の築き上げたこの国の継承者として、自分の頭で「どんな社会、どんな日本でありたいか」の答えを持つということだ。

この「憲法を起草する会」では、現行の法的拘束や法學理論など一切の枠組みを取っ払い日本人としての感性を頼りに毎月1回のペースで議論を進めた。第1回から第10回までの第1期は、「国権と民権、立法と行政、司法と法執

行、外交と防衛、自治、教育などテーマ別に自由討議をした。第11回から第21回までの第2期は「憲法起草の要点整理を中心に国内外情勢等についての議論。第22回から第39回までの第3期は、実際に「国体法体系、憲法、皇室典範、国民典範、世界へのメッセージ」を作成し内部審議と公開審議を行った。第40回から第66回までは、我々が目指す理想的日本の秩序社会創りのため「日本的共助社会のモデルの構築」について研究した。第67回から第90回までの第5期は「理念と実践についてのまとめ」と並行して、具体的行動としての日本的共助共同体づくり「熊野共同体」について話し合った。

途中、東日本大震災が起こり、被災地での支援活動のために中断はしたものの、あの時の被災地で見えた日本人の共助活動は、正に俺たちが目指す日本の文化慣習が如実に表れた社会の在るべき姿だった。自然災害は原発事故という人工的大災害を引き起こしたものの、政治の混乱によってまとまりの無かった日本人の心が、一致団結の様相を帯び国民レベルにおいては家族的同胞としての一体感が回復してきたように思われた。また、災害発生直後から、被災した現地はもとより、国中で日本人の善良なる行為が沸き起こり、あらためて、日本民族が歴史的に築きあげた道徳的社会規範の高さが確認され、『世のため人のために働く』という日本人の美徳が失われていなかったことに、大きな感激と勇気を得たものだった。

当時、米国の大手研究機関 AEI（アメリカン・エンタープライズ・インスティテュート）は、『日本の悲劇＝危機から分岐点へ?』という討論会を開催し、その中で次のような意見が出たことを紹介した。「日本人がこうした状況下で米国でのように略奪や暴動を起こさず、相互に助け合うことは全世界でも少ない独特の国民性であり、社会の強固さだ」「日本国民が自制や自己犠牲の精神で震災に対応した様子は広い意味での日本

文化を痛感させた。日本の文化や伝統も米軍の占領政策などにより、かなり変えられたのではないかと思いがちだったが、文化の核の部分には変わらないのだと思われた」そして「近年の日本は若者の引きこもりなど、後ろ向きの傾向が表面に出ていたが、震災への対応で示された団結などは、本来の日本の文化に基づいた新しい目的意識を持つ日本の登場さえ予測される」と論評している。これは、奴らにとってはこんなはずではなかったというネガティブ評価だが、日本人にとっては日本再建への明るい兆候であった。

いずれにしても、俺は一人でも日本を全うする。できれば仲間と一緒にそれを実現したい。その思いが、現在の「熊野飛鳥むすびの里」に繋がっていくことになる。



東日本大震災時、南相馬・飯館・浪江～いわき・広野一帯で食料品の支援と放射線量の計測を行っている筆者。